【特集】

ベトナム戦争終了（1975・4・30）から30年

――その戦争と反戦運動をいま省みて――

遠藤洋一・栗原幸夫・黒田光太郎・小中陽太郎・高見圭司・花崎皋平・東　一邦・武藤一羊・谷島光治・山本義隆

死者400万近くを生んだベトナム戦争が米軍の全面敗退によって終結してから、今年の4月で30年が過ぎます。また、日本でこの戦争に反対する反戦市民運動が開始されてから、満40年になります。さまざまな場所でその運動にかかわった10人の方に思いを述べていただきました。

反基地議員と呼ばれて二六年

遠藤　洋一

横田基地のあるまち、東京都福生市の市議会議員になって二六年たった。ぼくはこのまちでは今でも「元ベ平連のエンドーさん」と呼ばれる。「ベーヘーレン」とは、このまちの古いひとたちには、なにやら「おっかない」響きがあるらしい。おっかないは「恐ろしい」ではなく、「理解が出来ない」「得体が知れない」なものを呼ぶ。だから、二六年たっても、今もぼくは「元ベ平連の、おっかないヒト」らしい。

初めての立候補は一九七九年。ひとりの親戚も、同級生もいない、政党や宗教団体にも属していない、地元の有力者に知り合いもいない。そんなぼくについての情報は「横田基地反対らしい」と「ベ平連らしい」だけだった。

ぼくは、かつて「横田ジャテック」の仲間たちや、アメリカからやってきたPCS（パシフィック・カウンセリングサービス＝反戦兵士相談所）の弁護士や、活動家と福生市に事務所を構え、「さあ、ここで戦争の機械を止めよう」と横田基地デモを続けていたし、横田基地の若い米兵たちと一緒に、反軍新聞を出す手伝いをしていた。横田を選んだのは神楽坂のベ平連事務所から一時間と近かったのと、地下鉄で次の駅の大学からも近かったからだった。

ベトナム戦争が終わっても、米軍は安保条約とともに、日本に居座り、アジアに君臨していた。ぼくは、ぼくの持ち場のように「横田基地」を選び、そこで運動しようと足場を見つけようとしていた。そして見つけたのが「市議会議員」という職業だった。

選挙は、一番若かった事もあって二四人中二二番目に当選した。それ以来、ずっと7回当選を続けている。横田基地へのデモや、監視行動などの市民としての運動、そして、議会の中では、横田基地についての「一般質問」は毎議会連続一〇〇回を超した。

質問の意義は行政を通じて、横田基地の実態を市民に伝える、同時に他の議員諸氏に横田基地の実態を解説する事にある。行政サイドも懸命に答弁に努める、年に四回の「横田基地勉強会」のようなものだ。

八年ほど前に、腎不全を患い人工透析の患者＝障害者になったが、幸い議会を休むことはなかった。週三回、四時間のベッドの上での治療は、肉体的にも、時間的にも苦痛だが、その治療がないと死んでしまうので、仕方がない。ただし、選挙の時は精神的に悪い。頭の上を他の候補者の声が聞こえるのは辛いものだ。

どちらにせよ、基地は「票」にはならないものらしく、前回も最下位だった。

ベトナム戦争がなかったら、一九六八年三

月、偶然、清水谷公園のデモに参加しなければ、そして「ぼくたちは、歴史上最大最強の、あのローマ帝国のそれより大きな帝国主義軍隊と対峙している」なんて、若者の胸を熱くするような「オルグ」を聞かなければ、もっと違っていた人生だったかもしれない。べ平連の大食漢の大人たちと知り合わなければ、「人工透析患者」にならずに済んだかもしれない。でも、不満はない。

いま、日本中の米軍基地と、自衛隊は米軍の世界的な再編の中で、大きく変動するかもしれない。横田基地がどうなるかを知り、どうするかを提案しなければならない。

ぼくの、主張は相変わらず「戦争の機械はいらない」そして「出て行け米軍、なくせ自衛隊」今年五七才、どうも違う人生はもうないようだ。

（えんどう・よういち、福生市議会議員）

時代と共振する身体を

栗原　幸夫

六〇年代にわたしたちが手に入れたものの一つに「相互主体的」という理念があったと思う。送り手と受け手、書き手と読み手、呼びかける者と呼びかけられる者、演じる者とそれを鑑賞する者、……そういう一方通行を、対等な主体の交代可能な関係としてつくりなおそうという理念である。

以前にも「大衆化」という戦術はあった。前衛が自分の思想や政治的主張を大衆の間に持ち込み彼らを啓蒙し動員するという戦術だ。当然そこには、高い前衛と低い大衆という厳然とした差別があった。六〇年代の新しさは、このような前衛・大衆図式をくつがえす「相互主体的」という理念をさまざまな分野に生み出したことである。べ平連も間違いなくそういう理念を共有していた。

べ平連には各種各様の人が参加して各種各様の運動を自分たちで立ちあげた。そういう雑多な人の集まりのなかで、なぜ「相互主体的」な人間関係が生まれたのだろうか、と考える。そしてふと気がついたのは、あのときべ平連に集まってきた人たちはみんな、思想はばらばらでも、時代に共振する身体をもっていたな、ということだ。あの時代がどういうリズムを発信していたかは言葉で言うことはむずかしいが、それは言葉であるよりもまず音でありイメージであったからだ。そのリズムに乗りながら自分のビートを刻むことは楽しかったし気持ちがよかった。べ平連が体現した時代性と、若者たちの時代感覚とがうまいぐあいに共振したのだと思う。べ平連が体現した時代性は、前衛・大衆図式を信奉する活動家やきまじめな倫理主義者には、いかがわしく不真面目なものに見えただろう。当時、そういう批判はうんざりするほど聞いた。いや、いまでも「なに、時代と共振する身体を、だと？　そうやってお前は時代に流されていくんだよ」と軽蔑の眼を向けるあの人この人の顔はすぐに目に浮かぶ。しかし運動にはいかがわしい部分や不真面目な部分は不可欠なのである。すぐにパセティックになる純粋真っ直ぐ君には、「相互主体的」な関係などたんに観念のなかにしかない

あれから四十年をすぎたいま、べ平連残党としてつづけるささやかな運動のなかでかえりみると、あのときのような時代と共振しているという感覚は、じぶんのなかにほとんどないということを発見して愕然とする。時代が沈黙してしまったのか。いや、そうではあるまい。われわれの耳が老化してしまったのだ。

六〇年代がくり返されることなど絶対にあり得ない。べ平連中興の祖などもし出てきたらそれはイカサマにきまっている。いまの時代は六〇年代とはまったく違ったリズムを刻んでいるのである。誤解のないように強調しておくが、ただそれにうまく乗ればいいなどというのではない。そのリズムをからだ全体で受け止められる身体性を獲得すること、そしてそれに向ってわれわれのビートを打ち込むことで、そのリズム自体を機能転換していくこと、これが重要だと思う。時代のリズムのなかにいて、ある意味ではそのリズムの担い手である若い世代の感覚を私たちはほとんど知らないのである。わたしたちはもしかし

たら、「相互主体的」ということをせいぜい運動内部の人間関係だけに狭めてしまっているのではないだろうか。

最近必要があって、村上春樹の小説をほぼぜんぶ読んだ。ついでにインターネットの検索 google で村上春樹を検索した。四二万七〇〇〇件である。ちなみにベ平連は三五九〇。もちろんこの数字が特別な意味を持つわけではないが、しかしこの四二万という数字の向こうにあるものとわれわれとの関係を考えることは必要だと思う。それは運動に欠かせない想像力の問題だからだ。

（くりはら・ゆきお、評論家）

初めてのデモから「10の日デモ」の頃

黒田　光太郎

一九六八年六月二日、米軍のファントム戦闘機が九州大学箱崎キャンパスに建設中であった大型電算機センターに墜落した。ぼくにとっては大学に入学して二月後のことであり、すべてはここから始まった。

九大の学園闘争は、全国の大学闘争の中でも、ベトナム反戦、安保粉砕という政治的課題が直接的な問題であることが際立っていた。一九六八年一月には、佐世保で空母エンタープライズ入港反対闘争が大々的に展開された。その余韻は入学した頃にも残っていたが、ぼくはまだ社会と向き合おうとはしていなかった。ファントム墜落はまさに晴天の霹靂だった。墜落直後は連日のデモ、授業放棄で参加するのが当然であり、ぼくにとって初めてのデモだった。

八月になると、電算機センター建設再開が大学当局から提案されるようになった。ファントムを下ろして自主管理をするという大学当局と代々木系（共産党系）の四者共闘と、引き降ろし反対の反戦青年委員会や反代々木セクト各派などとの対立が顕在化した。大学当局が五〇周年記念講堂で開催した説明会をヘルメットの学生集団が粉砕した後、ぼくはそのまま会場に残って討論に参加した。そして、一方的な引き降ろしは止めようという声明に自分の意志ではじめて署名した。この後、滝沢克己、金原誠、瀬口常民、倉田令二朗、山田俊雄といった「造反教員」が身近に感じられるようになっていった。

福岡での市民の集まりは、何をおいても「10の日デモ」であった。市役所に10のつく日、10日、20日、30日に集まり、市街地を約二キロ歩いた。九大の教員が中心となって始められたというが、福岡ベ平連もこのデモの中から生まれていた。ぼくはなかなかベトナム反戦の市民運動に飛び込めず、「10の日デモ」に初めて参加するのは、無期限ストライキを決議し、教養部本館を封鎖してからの一九六九年春のことだった。

この年の夏には大阪城公園で「反戦のための万国博覧会（ハンパク）」が開かれた。福岡ベ平連はファントム残骸の一部を運んで、それを展示して話題となった。反戦フォークの歌集はとぶように売れた。この歌集は封鎖中の大学のオフセット印刷機で刷られた。一番よく印刷機を回した石崎昭哲さんはとうとう印刷屋になってしまった。

一九九九年一一月、ぼくはサントリー山崎の広告に登場した。この広告を担当されていた藤本義一さんが亡くなる直前に依頼されたのに応えて短文を書いた。原稿は見ていただけたが、残念ながら藤本さんが亡くなられた後に新聞には掲載された。

――ささやかな選択だった。一九六九年、「ベトナムに平和を」と福岡の街を歩き始めた。この一歩から“世界”は拡がり、多くの交流が生まれていく。レッドに親しみ、そして「山崎」にも出会えた。

（くろだ・こうたろう、名古屋大学教授、元福岡ベ平連）□

脱走兵の映画と『しょうちゅうとゴム』

小中　陽太郎

二〇〇五年のひなまつりの前夜、東京築地の朝日ホールに、高橋悠治さんによるバッハの「ゴールドベルグ前奏曲」のリサイタル

にでかけた。大人気でチケットの入手が大変だったが、出かけると田川律さんや黒川創さんらの顔なじみがたくさんいらした。悠治さんは柄もののシャツ姿で舞台に登場すると、ひょいと首を曲げて挨拶、そのままバリバリと弾き始めてものすごかった。鋭くこまやかな演奏に聞き惚れつつ、わたしは、おもわず四五年前の季節に引き戻されていた。あのことがなければ、わたしが、べ平連に加わることもなかった出会いである。

当時わたしはNHK名古屋のテレビディレクターだった。スタジオもせまくビデオ装置もない放送局で、どうにかして、ドラマを作りたいと思っていた。スタジオがないからドキュメンタルな作品ならいけるだろうと、作家を考えあぐね、当時『何でも見てやろう』で売り出し中の青年作家に電話した。ほどなく夜行の準急で夜明けの名古屋駅に降り立った小田実の印象はもう何度も書いた。わたしたちは建設中の四日市の石油コンビナートをたずねた。わたしはバレーのディレクターでもあったから躍進するコンビナートをバックにモダンダンスを躍らせることは決めていた。その音楽を誰にしようかと考えているとき、小田さんが、若手のピアニストで作曲家の高橋の名を上げた。わたしはおもいきって電話した。そして「ウェスターンのような音楽を」と依頼した。悠治さんは、「ぼくはウェスターンをかけないよ」といったが、怒りもせず、大変前衛的な音楽を書いてきた。録音は、東京の六本木のスタジオだった。演奏者がすごい。一柳慧（当時オノ・ヨーコさんと別れたところだったか）がピアノの鍵盤ではないところをたたき、スタジオ係が仰天した。林光さんが打楽器を打った。みな悠治さんというので応援に駆けつけたのだ。のち沖縄海洋博のプロデューサーをつとめる石島晴夫が手伝ってくれた。その音楽に合わせて、奥田敏子舞踊団が銀色に輝く石油パイプをバックにモダンダンスを踊った。そのまえを下請けの掃除婦に扮した山田昌さん（のち今村昌平の「黒い雨」を熱演した）が手押し車を押して通りぬけて、終わる。これが『しょうちゅうとゴム』である。そのビデオは消された。別に弾圧ではない。当時はビデオは中味より貴重で、次々にあたらしい番組を収録したのである。ただし放送時にキネコ（フィルム）にとった。和田勉が取ってくれた。本来なら、それは資料室に保管され、やがて六〇年代の終わりにまとめて廃棄された。それが私の手元に残ったのは、いつにかかってわたしが怠慢で資料室に返却しそびれているうちに、くびになり、誰も私に返せとは言わず、こちらもそうまでして返却することもなかろうと、押入れにしまいこんだ。べ平連が生まれるのはそれから三年後である。

以来、五度の引越しに耐え、キネコはわたしの手元にひっそりと残った。やっとそれを開いたのは、去年の六月であった。わたしはそのころのことを、上海からべ平連まで母の記録を通して描いた自伝小説『ラメール母』（平原社）と題して書物化し、それが終わって初めて和田勉のマジックインキでかかれた黄ばんだ包装紙を解いた。NHKの鬼頭春雄（いま「シルクロード」をとっている）がそれを聞きつけアルカイブに収納させてくれといった。いやというわけにもいかない。こうしてドラマは電磁的に復元されたが、キネコの実物はいまでも本棚の上に寝かせてある。誰にも渡さない。私の青春の証である。

ついでにもう一本残してあるものがある。こちらは皆さんも何度も見た『イントレピッドの4人の脱走兵』のオリジナル・ポジである。業界用語では「ポシ」という。このフィルムは、一九六七年、つまり『しょうちゅうとゴム』から五年後、鶴見良行のマンションで撮影した。カメラマンは初代のべ平連事務局長、久保圭之介が自分が関係していた日活のカメラマンを連れてきた。名は聞かなかった。音声はわたしがソニーの録音機で収録した。のちにハノイにも持って行った重い機材だ。私がキューをだした。吉川勇一が、三越の包装紙を皺にして裏に「これは終わりではない、始まりである」と書いたのは誰でも知っている。編集はプロにしてもらい、中目黒の川沿いの暗室にわたしが受け取りに行った、編集マンは大柄な人だったが、折悪しく酒に酔っていたか、ひどく不機嫌で奥さんがおろおろとなだめた。それから五日後に、音なしで上映し、テープは横で再生して、学士会館

で記者会見して大騒ぎになった。そのときのTBSニュースが最近発見されたが、これも音声はない。ナレーションを入れたのはもっと後である。そちらのフィルムは、各地で上映された。吉岡忍がDVDにしたはずだ。さて一方わたしの手元には、音をつけない前のポシの生フィルムがのこった。この原フィルムを松竹専務の従兄弟を介して、現像所のイマジカに持ち込み、洗浄してデジタル化した。とてもきれいなポジだった。しかい七万円とられたので私は研究費で処理しようとしたが、請求書に「脱走兵」あったので、あわてて、一緒にデジタル化したほうのタイトルを借りて「伊勢湾台風」と書き換えた。

それをもとにわたしはジョン・レノンやビン夫人の写真をいれて自家用に編集した。そのころCBCがジェンキンスにあわせて取材しに来た。後藤克幸プロデューサーは、TBSのニュース映像を探し出してきてそれとあわせて去年の八月一三日の終戦特集に放送した。だからいまでは脱走兵フィルムは二本ある。

それを『しょうちゅうとゴム』とあわせて、ペンクラブで上映した。京都でも関谷滋と鈴木正穂に応援してもらって葵教会で上映したが、べ平連の人はこなかった。たぶん既に見ているものと同じと思ったのだろう。わたしは「ミュージカル脱走兵」を歌手の碧川るり子作で五年七月一日、草月会館で上演しようと準備を進めている。これが私の手元に二本のフィルムがあるわけ。

わたしは長いこと自分はNHKをやめたと同時に映像もやめたと思っていた。映像は企業でなければ出来ないと信じていた。だがそうでもない。フジの「スマスマ」のディレクターがこれをみて『僕は長生きする』といった。長生きと脱走兵がどういう関係があるかわからないが、映像も、音楽も、市民運動も、一瞬の虚空に消えると見えて、どうしてどうして人が関与したものは永遠だ、とわかった。バッハのゴールトベルグがどうして今に再現されるか、わからないが、映像も永遠である。わたしは『しょうちゅうとゴム』を大学のスタジオでDVDにして、悠治さんに上げた。彼はそれが癖のひょいと、首をかしげて受け取ってにやりとわらった。

（こなか・ようたろう、作家、中部大学教授）

「反戦青年委員会」の結成と準備

高見　圭司

（1）　結成の集まり

一九六五年八月三〇日、東京・千代田区永田町の社会文化会館で、約五〇人が結集して「全国反戦青年委員会」（略称）が結成されました。五〇名の約半数が、総評傘下の各単産青年部の指導的なメンバー、それに、学生運動と「新左翼」系の中心的な人びとでした。

また、三人の民主青年同盟（民青）の中央委員が出席していました。この集まりでは、ベトナム戦争反対、日韓条約批准に反対して闘うことが意思統一されました。

ただ、民青の代表が、反戦青年委員会の結成に反対し、六〇年安保闘争時の「青年学生共闘会議」の再出発を主張してゆずりませんでした。討論の結果、民青を除く参加者のほとんどが「反戦青年委員会」という新しい名称を持って出発することを決めました。民青の三人は討論の途中で退席し、その後、共産党、民青ともども、激しく「反戦青年委員会」に対して敵対的態度をとりつづけたのでした。

「反戦青年委員会」の正確な名称は、「ベトナム戦争に反対し、日韓条約批准阻止のための全国反戦青年委員会」としました。

代表は、社会党の楢崎弥之助衆院議員、事務局は、総評本部の山下勝青年部長、社会主義青年同盟の立山学書記長、それに私の三人でした。

（2）　その準備

私は、「全国反戦青年委員会」と呼ぶ結成から六八年六月一五日、日比谷野外音楽堂の反戦青年委員会の集会・デモのあいだを第一期反戦と言ってきました。

この第一期は、結成呼びかけとイニシアティブが、社会党・総評であったことは、代表と事務局のメンバーを見れば分かるでしょう。

裏の仕掛けを紹介しますと、この組織の結

成に向けた準備は、社会党青少年局の青年対策委員会における討論によってすすめられたのです。この委員会の構成メンバーが総評、社会党、社青同（社会主義青年同盟）であり、私が社会党の青年対策部長でありました。

この準備に力をいれた私たちの思いは、次のようなものでした。

まず、何よりも、六五年ごろのベトナム戦争に対する闘いを、青年労働者の力を結集して闘おうという強い意欲がありました。

そして、六〇年安保闘争のような圧倒的な大衆の結集を再びつくりあげたいという思いでした。この二つの思い、意欲はからみあい、ないまぜになって、私たちの心の中で、日々、成熟してゆきます。六〇年安保闘争のあれほど大衆的熱気をもった闘いが、潮が引くように後退してしまっている現状に対する寂しさ。まして、国会へのデモは「請願デモ」と称し、旗を絡げて歩くこと、また腕章までも警察権力によって〝取れ〟と言われるくやしさ。これは、まさに屈辱そのものでした。

六〇年安保闘争を、権力の抑圧を大衆の力ではねのけ、自由に闘いぬいた経験をもつ私たちにとっては、耐えがたいものでした。

（3）私の誇り

反戦青年委員会の結成は、まことに六〇年安保闘争後の四年余の屈辱をはね返す闘いへの、出発となりました。

反戦青年委員会は、「べ平連」「全共闘」とともに、六九、七〇年闘争へ向けて、また、その後の過程のなかで、さんきょうだいのように、一つの時代を闘い、かけ抜けたと思います。

王子闘争をはじめとして、羽田、佐世保、新宿米タン阻止闘争、そして三里塚闘争……数えればきりのない大衆的な闘いの一つの潮流であった「反戦青年委員会」で生きたことを、私は誇りに思います。

（たかみ・けいじ、元「全国反戦青年委員会」事務局）

人生行路の転機だった ベトナム反戦運動

花崎　皋平

この歴史の区切りに立って思うことは、この区切りが、私にとって人生行路の転機でもあったことです。振り返ると、私の七〇余年の人生の区切り目に戦争があり、そのつど自分の歩む道の変更を迫られてきました。たった七〇余年のうちに、満州事変（中国東北部への侵略戦争）、日中戦争、太平洋戦争、朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、アフガン戦争、イラク戦争、主なものでも八つの戦争を経てきました。軍国少年から西欧の文学（詩）、哲学、キリスト教に熱い関心を抱いた一〇代。朝鮮戦争をきっかけにマルクス主義を学んだ二〇代。共産党に入党したが、水爆実験問題、知識人の批判弾圧で反対派となり、除籍された三〇代。そのすぐ後に、べ平連運動に加わり、大学闘争に造反教員として参加し、佐藤訪米阻止のべ平連のデモで逮捕、拘留され、学生裁判の特別弁護人を引き受け、判決後に北大教員をやめました。それ以後はいま風にいうとフリーターをしてきました。ですからちょうど四〇歳にして、人生行路をぐいとかえたのです。アイヌ民族と近しくなり、田中正造、松浦武四郎の生き方と思想に共鳴し、ただの人（ピープル）としての生き方をいまも模索しています。

その頃書いた文章を読み返してみると、いまに通じる内容を持っているので、少し引用します。ベトナム「和平」交渉が大詰めを迎えていた、一九七二年一二月一〇日発行の札幌べ平連ニュースにのせた「影絵の軍隊――ベトナム「和平」をめぐって」という一文からです。

「たとえどのようなかりそめのものであれ、『和平』が成り立つとして、そのとき万人のまえにくっきりとうかびあがることがまずひとつある。

世界第一位の富と力を誇り、世界最高の科学技術をすみからすみまでゆきわたらせた最強の軍事力を持ったアメリカ帝国が、その力をふりしぼり、核兵器以外のあらゆる新兵器を駆使しておこなったこの限定戦争に敗北したということ。たんに敗北しただけでなく、

アメリカにとってどんな価値ももたらさなかったことがそれである。（中略）

そしてこのことは、たちまちわたしたち日本人の問題なのだ。かつてドイツと肩を組んで破れ、第二次世界大戦後、アメリカのあとについて、GNP 世界第三位へと富と力をもとめて駆けつづけに駆けてきたわが日本帝国が、明日、この犯罪の後継ぎにならないという保障があるだろうか。そのことへのつよい不安がわたしにある」。

この不安は、今日、私たちの眼前によりいっそう切迫したものになりつつあります。私たちにとって、ベトナム戦争は、非アジア人としての日本人を照らし出す鏡の役割を持っていました。その文章では、「私たちは、そういう自分たちの姿と真にリアルに向きあえるだろうか、向きあうにはどうしたらいいだろう」と問い、

「私たち本人の人間としての復元は、東北アジアの一部として南は沖縄から北は北海道までの日本列島の居住者として自分をみいだすことのような気がする。つまり、この場合には、国家としての統合とは徹底的に対立する身の置き方である。自分に舟があり、操船技術があれば、舟を漕いで、朝鮮でもベトナムでも中国でも、やあ今日は、と行って帰ってくるようなアジアの一つの島の居住民であること――。（中略）

いま、地域住民運動が全国各地で起こりつつあるが、その運動は、わたしたちに地域に住む者としての自己の復元、自立、自治へのめざめを呼びかけているように思う。その地域への自覚は、ひろくはアジア地域に住む者、アジアの住民としてのめざめにつながる質をふくんである」。

いまも、私はこの考えの延長線上にいます。わたしにとってベトナム戦争は、生き方の根もとをゆすぶるものだった。これは形容の言葉ではなくて、実際に変化の大きさでいっているつもりだ。

大学をやめて定収入を持たなくなり、アカデミックな学問――それはわたしにとって始まったばかりであり、大きな魅力を持った活動分野だったが――を放棄して、一市井人として生き始めた。（中略）そうした生き方の転換を悔いているかといえば、まったく悔いていない。これまでの「わたし」の否定がどこまで身についているか、自分ではわからない。しかし、生きている実質の手ごたえ、重さの感覚はうまれてきている。自分が教育、文化支配官僚の一端に座し、内地から北海道へ渡ってきた負の来歴を、いまはハッキリと否定的にみることができ、それを不問に付してのべ平連（代表）のインチキだったことがよくわかる」。

一九七五年四月三〇日のサイゴン陥落の知らせを受けて書いた「サイゴンが陥ちた日に」という文章からもすこし引きます。

「『ベトナム』との出会いは、わたしに、宗教的経験でいう『回心』に近いものを恵んでくれた、といま思う。（中略）一口にいって人間としての生き方への覚醒をうながされた、といえる。知識や力を誇らぬただの人間として生き、その生の根拠からたたかえ、と呼びかけられた。いろいろなものを捨てざるをえなくなった。それはけっしてラクなことではなかったが、生の基盤と接するための再出発にはどうしても必要な必然であった。ベトナム解放のためにたたかった人びとは、未曾有の苦難をたんに受難したのではなく、人間の名においてあえてそれを引き受けてきた。そのことによって正義のなんたるかを身をもってしめし、ついに不正な迫害にうちかった。このことがもつ意義はふかく、およぶ影響はひろいだろう」（以上、二つの文とも、『風はおのが好むところに吹く』、田畑書店、一九七六年に収録）。

いま私が「ピープルネスへ」という論文の形で練り上げようとしているものは、じつはここで単純な命題としてのべていることを敷衍し、展開する作業にほかなりません。

（はなざき・こうへい、哲学者）

あたりまえに反戦の声をあげられるまちを

東　一邦

わたしは一九六九年、大学生になった一九歳のときにベトナム反戦のための市民団体

「ベトナムに平和を！埼玉市民連合（埼玉ベ平連）」に参加した。「埼玉ベ平連」の活動の舞台は、私と仲間たちの多くが生まれ育った浦和のまちだった。わたしたちは、帰るべきふるさとで、「まちの中から反戦の声を」と、駅でビラをまき、集会を呼びかけ、デモを主催し、警察官と小競り合いをくり返し、捕まったり奪還したりをはじめたのだった。

やがてわたしたちは「まちの中から反戦の声を」から「あたりまえに反戦の声があげられるまちを」と考え始める。帰るべき「ふるさと」ではじめた市民運動は、わたしたちが生きのびられるように地域を変えていこうという方向に向かわざるを得なかったのである。

「埼玉ベ平連」は七〇年安保闘争の波の去ったあとの七一年四月に、代表だった小澤遼子さんを浦和市の市議会議員選挙にかつぎだす。このわたしたちの試みは、その後全国に雨後のたけのこのように登場する「市民派議員」のはしりのひとつではなかったかと思う。

すでに三五年も前のこのときのこわいもの知らずの試みが、いまに至るわたしと「まち」との関係を決め、そしていま、熱心にとりくんでいるNPOの活動への参加にもつながっている。

ベ平連運動は、それまでの左翼色の強かった革新政党や労働組合、学生運動などの戦後日本の社会運動に「市民として」という新しい概念をもちこんだという面で画期的だったことは多くの人が認めるところだろう。

最近しみじみ思うのは、もうひとつ、わたしたちのようにまちの中で声をあげはじめたベ平連運動は、「世間」という得体の知れない秩序体系に対して、「市民社会」というもうひとつの価値を対置した運動だったのではないかということである。

まちのなかで「世間」は、自治会や民生委員協議会や青少年育成会、PTA、商店会、それらと混然とした保守系議員の後援会として現象している。そして小さなまちの行政はこれらともちつもたれつの協力関係をたもちながら、地域社会を形成してきた。

三五年前に「市民として」デモをくり返し、「あたりまえに反戦の声があげられるまちを」と市議会議員を送り出したわたしたちまちのベ平連は、おそらくこのときから「世間」を相手にし始めたのだ。

それから三〇年以上を経て、日本の社会は「市民」の活動を認めざるを得なくなり、九八年にNPO法が成立した。わたしも五年前に「中間支援組織」として設立した「さいたまNPOセンター」の理事として、埼玉県やさいたま市の「行政との協働」とか「まちづくり」とかの委員会の委員になったりしている。こうした委員会は「世間」の集積場である。

そうした場に、NPOという新しい衣をまとって「市民」として、「あたりまえに反戦の声があげられるまちを」と考えるベ平連のわたしが参加しはじめたということだ。

だからわたしは、多くのNPOの活動家のように「かつての政府批判ばかりのベ平連のような市民運動はもうダメで、これからは行政とも『協働』する新しいNPOの時代だ」などとはまったく思っていない。

わたしにとってNPOの活動は、「世間」という真に変革したかった相手を前に、ベ平連以来の市民運動で学び培った「市民」の論理と倫理が試される場でもあるように思える。

ほんとうのことを言えば、政治的課題を避け続け「銃後の守り」になりかねないNPO潮流にはげっそりすることがある。一方、正義にしがみついて自ら魅力的であろうとしない反戦運動派にもうんざりしている。それでも両方に関わりながら、まちの中でいそがしく動きまわっているのは、これだけはまちがいないことだが、わたしが「あたりまえに反戦の声があげられるまちを」と考えるベ平連だったからである。

（ひがし・かずくに、さいたま市在住、浦和市民連合、さいたまNPOセンター）

抵抗への支持と連帯との関係性

武藤　一羊

四〇年前のベトナム戦争と今との最大の違いの一つは、かつては、誰に反対するかだけでなく、私たちが誰を支持するべきかがは

つきりしていた、少なくともはっきりしていたと思えたことだろう。ベトナムに平和を！を唱えるベ平連の運動も、ごく初期から「ベトナムはベトナム人も手に！」というサブスローガンをかかげていたが、これは「解放戦線に勝利を！」というスローガンとは区別されていたとはいうものの、強く解放戦線支持を含むものであった。北ベトナムと解放戦線の戦いは、帝国主義と植民地主義を打ち破る民族独立・統一の闘いとして疑うべからざる普遍的な正統性を備えていた。悪の元凶はアメリカ帝国主義、善玉はその侵略にたいして毅然として闘うのはベトナム人民、そして私たちはこのベトナム人民を支持し、それに連帯するというのがベトナム反戦運動の基本的スタンスであったが、このベトナム人民は北ベトナムと解放戦線によって組織的にもモラルの上でも代表されているという前提が、反戦運動全体に共有されていたと言ってよい。

（ベ平連はサイゴンの第三勢力や反共の立場に立つチクナット・ハーン師など、解放戦線以外の勢力とも関係を持ち、明示的に解放戦線支持ではなかったとはいえ、解放戦線に対抗してこれらの勢力を支持するという立場ではなかった）。

今日、とくに9・11以降の状況のなかで、反戦運動が誰を支持し、誰と連帯するかは自明ではなくなった。悪玉は明確に見えている。世界をしきる権利を一方的に宣言し、国際法も他国の主権も無視して一方的に軍事力を行使するアメリカ帝国である。この帝国の侵略は、それへの抵抗権を発生させる。私たちはイラクの民衆の抵抗権をはっきり認める必要がある。それは、暴力対暴力だからどちらも悪い、という立場――アメリカを免罪する立場――から明確に区別される立場である。そこから私たちは、外国占領軍の無条件撤退という要求を引き出しているのである。だが侵略と占領の下におかれたイラクで、抵抗権はあらゆる形で、またさまざまな動機に沿って行使される。そのなかには、米軍への武装攻撃やファルージャでのように米軍への自衛抵抗のほか、占領軍・かいらい国家体制の不安定化のための爆弾攻撃や「自爆テロ」など、一般市民を巻き添えにする暴力行使も含まれる。私たちは、これらが抵抗権の行使だからと言って、無条件にそれらを支持はできない。抵抗権があるということと、私たちが誰と連帯できるかということは、関連はあるが同一の問題ではないのである。ベトナム反戦では、ほとんど重なると見えた二つのレベルが、ここではっきりと分離してきているのである。

連帯をめぐるこの状況――それはイラク同様米国のアフガニスタン侵略でもそうだった――は、困難をはらんでいるとはいえ、連帯ということの本来の姿だと私は考えている。ベトナム人民の独立・統一への権利への無条件支持と、解放戦線への連帯とが一致した――かに見えた――というのは幸いなケースであったが、同時にそれは不幸でもあったと今から総括し直す必要がある。このかつての連帯関係においては、解放戦線は理想化され、私たちにとって外部化され、当時のベトナムの民衆の闘い、恐れ、苦痛、苦悩、動揺の実際から私たちを遮断する盾としてさえ作用したのではないかと思えるからである。イラクの現実と関わる上で見えてきているのは、連帯とは、双方向の相互作用の中で、新たに共有しうる運動を作っていくことにほかならないということではないだろうか。むちゃくちゃに異なった現実の中で、それぞれが自分たちの必要と原則に照らして相手を判断していく、そして相互作用に入っていく。その中でこちらも変わるし、相手も変わるダイナミズムが展開していく。お互いにあらかじめ連帯しうる相手がいるわけではない、という一般的な前提の下で、なおかつ接触し、議論し、論争し、連帯の基盤を発見し、作り上げていくというのが、今日の反戦運動の中で私たちが挑戦すべき課題だ。この課題は四〇年前にも存在したのだが、当時のベトナム反戦運動はその姿を見切ることができなかったのである。

（今日の連帯の問題性については、季刊『ピープルズ・プラン』のNo.28「イラクの抵抗運動とグローバル反戦運動の出会い」、『インパクション』No.145　武藤一羊　ききて天野恵一「帝国の虐殺への『抵抗の暴力』をめぐって」などを参照）

（むとう・いちよう、ピープルズ・プラン研

究所）

反戦デモは「無駄な抵抗」か

谷島　光治

ちょうちんデモは636回目

一昨年のことです。山梨具牧丘町柚口の飯塚（旧姓志賀）寛子さんから電話があり、ちょうちんデモのきり絵を、受け取ってもらえないかということでした。制作されたのは、金子静枝さんですが、三鷹市井の頭にお住まいの入江さんが保管していらっしゃいました。有難いお話なので、早速いただきに伺いました。（本誌前号の表紙のきり絵です。）

東京・吉祥寺駅南口から三鷹駅前に向かう反戦デモが始まったのは一九六七年の七月で、翌一九六八年のデモを金子静枝さんが、きり絵にされたとお聞きしたのですが、三〇年以上前の作品とは思えないほど色鮮やかで美しく、そして代表の、もののぺながおきさんを初め、参加者一人一人を名指しできるほど繊細です。十号ほどの大作なので、飾る場所をいろいろ考えたのですが、ちょうちんデモとは因縁が深い、「三鷹たぺもの村」に置いてもらうことにしました。暫く仮枠に入っていましたが、先日表装を終え御披露目しました。ただ、ちょうちんデモのメンバーは、芸術に関心が薄い傾向があるので、この絵のすばらしさをわかってもらえるかどうか、気がかりではあります。

ちょうちんデモは、当時の「ぺトナム反戦」から「アンポをつぶせ！」にかわり、今でも毎月一五日に、少人数ですが続けています。この三月一五日が六三六回目でした。

各地で月例デモは続く

ぺトナム反戦のころは、毎回、デモの参加者が百人を越す盛況で、地元の人たちも応援してくれました。ぺトナム戦争が終結したころからは、人数が減る一方で、参加者が二人ということも、よくありました。二人のうち一人は宣伝地カーを運転しますから道路を歩くのは一人だけ、「危ない、車道を歩くな」などと怒鳴られることもありました。しかし、湾岸戦争のころから、また反戦の機運が高まって、参加者や沿道の拍手も増え、カンパを頂戴したこともあります。

立川のC―1デモも続いています。C―1ジェット輸送機が月に一回入間基地から立川基地に来て、着・離陸訓練をするのに反対するためです。立川基地の滑走路は、もともとプロペラ機用で短く、C―1も老朽化しています。市街地にある立川基地で訓練するのは、非常に危険なのです。デモが滑走路の南端に差しかかるころ、C―1が轟音をたてて頭上に現れると、無意識のうちに「C―1は来るな」と大声を張り上げてしまいます。午後二時四五分立川中央公民館出発です。C―1飛来に合わせるため、日は月によって違います。

横須賀のデモは賑やかです。毎月最後の日曜日の午後四時ころ、京浜急行の汐入駅で電車を降り、海岸のほうに向かうとすぐ、サックスのメロディが聞こえてきますから、デモの出発地点はすぐにわかります。歌声も響いて、活気がある楽しいデモです。米軍基地の前では、基地内の軍人・家族に対する英語による呼びかけも続けているようです。港内には自衛隊の護衛艦や、潜水艦が、停泊しています。港の奥には米軍空母やイージス艦のマストが見えたりします。海面は、陸上と違って、所有者がないのだそうです。だからデモ隊のヨットやゴムボートが入り込んでも阻止できないわけで、陸上の反基地闘争では考えられないユニークな闘いを続けています。その点は辺野古の闘いにも通じるところがありそうです。横須賀はちょっと遠いのですが、一度は参加してください。私も時々参加します。

佐世保のデモは毎月一九日の午後六時、松浦公園スタートだそうです。私はまだ参加したことがありませんが、写真で見たところでは、ちょうちんデモとは比較にならないほど盛大なデモのようです。

東京、下谷教会のデモは、一度だけ参加しました。私が参加したときは女性や子供さんが多くて、大声は出さないけれども、みなで心から平和を願っているようなデモでした。

デモを続けても何も変わらない？

基地前のデモと違い、ちょうちんデモは、反戦平和への行動を呼びかけるのが目的ですから、沿道の人たちからの反応がないと、元気が出ません。参加者や支持者が減っても続けることに意味があると思ってきましたが、戦争は終らず、新しい戦争への準備も着々と進んでいます。

既に「民主主義」は死語になりました。しかし、選挙の一票だけでは政治を変えることができません。これからも、仲間を信じて、行動し続けるつもりです。

（やしま・こうじ、安保をつぶせ！武蔵野・三鷹ちょうちんデモの会）

王子野戦病院撤去闘争の衝撃

山本　義隆

ベトナム反戦運動の経験について書くように依頼された。率直に言って、私は現在、立派なことを言える立場になく、もちろん今日の運動に直接役立つようなことは書けそうもないので、かなり躊躇したが、他でもない吉川勇一さんの依頼なので引き受けることにした。とりとめない回想だが許容してもらいたい。

米軍のベトナムへの本格介入から一九六八年の東大闘争直前まで、物理学科の大学院生であった私にとっての反戦運動は、ひとつは街頭でのデモであり、いまひとつは物理学会内部での米軍資金をめぐる闘争であった。後者は、六六年の物理学会主催の半導体国際会議に米陸軍極東研究開発局から資金が提供されていたことが判明し、その責任追及と、物理学会は今後軍と関係をもたないことを決議する運動である。それは六七年九月の物理学会総会で「日本物理学会は今後内外を問わず、一切の軍隊からの援助、その他一切の協力関係をもたない」という「決議」を賛成一九二七、反対七七七、保留六三九で可決することでもって一応の幕を閉じた。その詳しい経過については、昨年末にみすず書房から上梓した『物理学者ランダウ』の「あとがき」に書いたし、その一文はまた雑誌『みすず』の二〇〇四年一二月号にも掲載されたので、そちらを参照していただきたい。ともあれ、この運動は、それまで研究至上主義が無前提的に是認されていた学者の世界の内部で、研究が遅れることになってもよい、いや研究をボイコットしなければならない時もあると、初めて公然と口にした運動であった。なお「決議」は今も生きているのであり、その重要性はより高まっていると言えよう。

他方、学外のデモとしては、当時、都心はもとより横須賀や立川にもしばしば出向いたが、もっとも強烈な印象が残っているのは北区王子の米軍野戦病院撤去闘争であった。先の『物理学者ランダウ』はソ連の天才物理学者ランダウがスターリンから受けた弾圧について、グラスノスチの後に判明した資料を編集・翻訳したものである。そのランダウは一九六八年四月一日に死んだが、そのときのことを私は上記の「あとがき」に「一九六八年四月初めといえば、東大では医学部処分撤回闘争の真っ只中で、……それに王子では米軍野線病院撤去闘争がほとんど連日大衆暴動の様相を呈していた」と書いた。これにたいして「王子の闘争て何だったのですか」と質問された。そういえば、当時を回顧した文書の中で――私の管見のおよぶ範囲で――王子闘争に触れたものを見たことがない。忘れられた闘争になっている。その訳は、この闘争の本当の主役が、当時「群集」とか「野次馬」と呼ばれた未組織の地区住民であり個人や小集団でやってきた数多くのデモ参加者であったからではないだろうか。

その闘争の詳しい経緯を書く余裕はここにはないが、前年末から波状的に始まっていた学生のデモにたいして、そのたび毎にとりまく「群集」の数が増加し、二月・三月のデモでは、野線病院の正門前ではデモ隊が来る以前に群集が群がり投石が始まり、家から物干し竿などを持ってきては病院のサーチライトを破壊し、そのような実力行使が、学生のデモが引き揚げた後も、深夜まで続けられるようになっていた。それがピークに達した四月一日の闘争について二日の『毎日新聞』には

「正体不明の群集」との見出しで「このひとたちはヘルメットも角材も持たず、ジャンパーや背広、カーデガンからドテラ姿、ナイトガウン、それにサンダル、ぞうりばきといったさまざまな服装。しかも全学連の学生と同じように激しく警官隊に投石し、やじり、交番まで襲撃した。……群集との衝突が王子のデモの性格を一変した」とある。同日の『朝日新聞』にも「集まった群衆のかなりの部分が〝反警察的〟の動きもみせ、学生以外に十六人が逮捕された。群集は騒ぎのたびにふえる一方。この夜も二千人にのぼった。サラリーマン風、着流しの中年男、子どもを背負ったり子どもの手をひいたゲタばきの主婦、若い娘さん、一般学生など実にさまざま」とある。そしてこの夜、会社員榎本さんが死亡し、翌日「虐殺抗議集会」がもたれたが、三日の『朝日新聞』では「学生は午後十一時署前の集会を終り、王子駅に向かって解散したが、一部群集の投石騒ぎは学生たちが立ち去ったあと、いっそうひどくなった」とある。

私と言えば、北区の下町の住宅地帯での夜の闇のなかに湧き出した群集のパワーに圧倒されたのであった。いまでは忘れられた闘争になっているが、私には、当時の街頭闘争のなかでこの王子の闘争の何波にもわたるデモはもっとも強烈な印象を残している。そして、その体験と物理学会での米軍資金をめぐる議論の問題意識をもって、六月に全学化する東大闘争に向かうことになった。

サンダルばきのベトナムの兵士が最新鋭の装備を備えた圧倒的な米軍の軍事力と互角以上に戦っているという事実が、世界の反戦闘争と一九六八年の世界的な学生叛乱に与えた影響はやはりきわめて大きかったと思う。

（やまもと・よしたか、物理学者、元「東大全共闘」議長）

Information

4月6日(水) 18:30～**「これって犯罪？暴走する公安と脅かされる言論社会」** 場所：東京・霞が関・弁護士会館クレオ　発題：魚住昭、奥平康弘、石埼学、各弁護団　主催：立川テント村事件弁護団、国公法弾圧弁護団、葛飾ビラ入れ弾圧弁護団、板橋高校事件弁護団　参加費：1000円

4月9日(土) 13：00～21：00**「高遠菜穂子さん講演会　イラクに近づこう、世界につながろう」** 場所：東京・明治学院大学白金校舎3201教室　講師：高遠菜穂子、綿井健陽　資料代：1000円　主催：Body And Soul(E-mail:info@body-and-soul.org)　協力：BOOMERANG NET

4月9日(土) 13：30～17：00**「公開シンポジウム・テロリズム　殺すこと殺されること」** 場所：東京・ペアーレ新宿（中央社会保険健康センター）　講師：小田実、鶴見俊輔　主催：思想の科学研究会　連絡先：思想の科学研究会事務局　電話：03-5389-2101

4月10日(日) 13：00～17：00　**講演会「イラク戦争、憲法九条と私たち――ベトナム戦争終結30年のいま」** 場所：東京・人見記念講堂　講師：小田実、澤地久枝、鶴見俊輔　参加費：1000円（高校生以下は500円）　主催：市民の意見30の会・東京、市民意見広告運動　協賛：BOOMERANG NET　連絡先：本会事務局まで。

4月16日(土) 13：30～　**沖縄に新しい米軍基地はいらない集会＆コンサート**　場所：東京・上野水上音楽堂　出演：月桃の花歌舞団、知念良吉、海人、花＆フェノミナンほか　訴え：辺野古現地・平良夏芽ほか、横田・座間・横須賀等各地　参加費：1000円（前売り券：800円）　呼びかけ：辺野古への海上基地建設・ボーリング調査を許さない実行委、大田昌秀、照屋寛徳ほか　連絡先：沖縄・一坪反戦地主関東ブロック（電話：090-3910-4140）、市民のひろば（電話：03-5275-5989）

4月24日(日) 13：00～　**4・24三里塚・東峰現地行動「もう空港はいらない」** 場所：千葉・東峰共同出荷場　集会後デモ　主催：三里塚・暫定滑走路に反対する連絡会　現地連絡先：千葉県山武郡芝山町香山新田31-4 山崎方（電話：0479-78-0039）

本誌前号のインフォーメーション欄でお知らせした**毎週月曜夕刻**からの防衛庁デモ、**毎週土曜夕刻**の新宿西口地下広場の意思表示行動は続行中。